

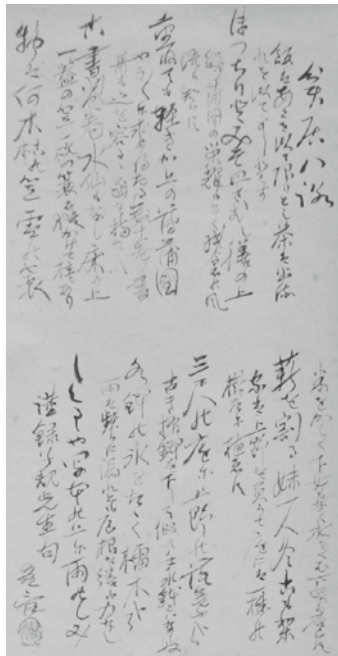
子規を伝える 柳原極堂と寒川鼠骨

来たる平成二十九年は子規・漱石・極堂の生誕一五〇周年にあたります。それに先立ち、今回は子規の文物を現在に受け継ぎ、子規顕彰活動に心血を注いだ二人の松山出身の人物を取り上げます。そのうちひとりには柳原極堂（きょくどう）であり、もうひとりには寒川鼠骨（そつこつ）です。

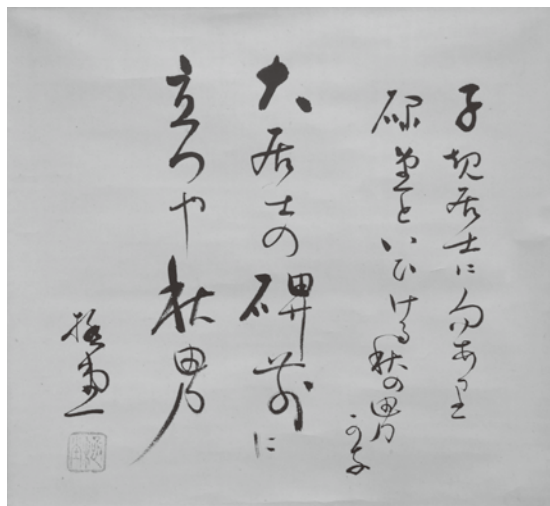
子規没後、柳原極堂はあらためて子規とその生誕地松山の研究の必要性を痛感し、俳誌「鶏頭」に「子規とその郷里松山」を連載、さらに「松山子規会」を発足させます。こうした極堂の尽力が無ければ、「正岡子規」は「中央」で識られるのみの存在であったかもしれせん。

一方の寒川鼠骨は、子規庵保存会の中心的存在として、東京根岸の子規庵の保存整備に全力を傾けました。また鼠骨は、子規没後香取秀真（ほつま）や藤檀堂（わらひま）たちと子規庵歌会を開き、歌壇的な野心から遠い位置で子規の短歌を受け継ごうとします。

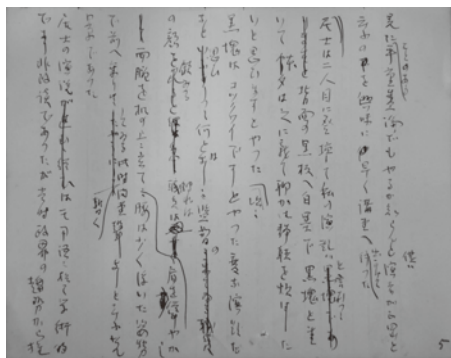
今回の特別展では、子規の生誕地松山と東京の子規庵を、子規にとって重要な「場」であると考えた柳原極堂と寒川鼠骨に光をあて、彼らがおこなった子規顕彰事業に目を向けるとともに、彼らの短詩型文学作品やジャーナリズム活動をあらためて紹介してゆくものです。



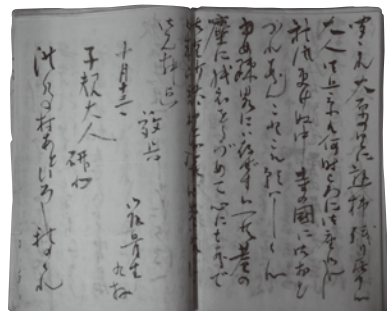
子規句鼠骨書石井柏亭画「貧居八詠」



柳原極堂句「大居士の碑前に立つや秋男」



極堂ノート 子規の中学時代の思い出をつづる。



寒川鼠骨の子規あて書簡 明治28年10月13日 京都からの近況報告。

あきよくくさくさとそらいろ

